

いての話と九条道家による祈念・鎮魂とを直接むすびつける資料は今のところ何も見つかっていないが、私は何らかの関わりがあるのではないかと推測している。さらに付け加えると、物語文学の最高峰といわれる『源氏物語』の背後に撰関流の藤原道長が存在しているように、『平家物語』がほぼ今の姿になった背後には、同じく撰関流につながる九条道家が存在していたのではなからうか、という気さえするのである。

『平家物語』には数多くの話が含まれているが、出来るところから一つずつその背景を明らかにし、あわせて物語全体の背景を知りたいとこだわつつ、三十余年が過ぎてしまった。まだまだ道は遠く、残された時間は少なくなっていくが、これからも『平家物語』成立の解明に力を傾けたい。

(女子聖学院短大非常勤講師)

子どものこだわりと保育

大橋 利恵子

けい君は三歳児、入園式の日はお母さんと一緒だったので何事もなく過ごせました。し

かし二日目の朝、けい君はお母さんから離れようとしません。三歳の最初は無理に離そうとせず、お母さんにゆっくりつきあってもらい、だんだんに園生活に慣れてから、お母さんとバイバイできるようにしています。

けい君もどうやらお母さんとバイバイとできるようにはなったのですが、廊下から上目使いで担任の先生の顔をじっとにらんで動きません。

「けい君、おはよう、出席ノートにシールを貼って遊びに行こう」と担任が誘うと、ゆっくり近付いてきます。

「かばんおろして」と言うと、首を振ります。

「あれ、とるのいやなの。それじゃ、そのままでもいいからシールだけ貼ろうか」

ということ、とりあえず出席ノートにシールを貼って園庭に遊びにいきました。砂場に行って穴を堀り始めたのですが、けい君はかばんを肩にかけたままです。

「けい君、かばんここに置いておこうか」

と声をかけると、けい君は必死な顔をしてかばんを押さえています。その様子を見て、担任はいそいで、

「いいよ、そのままかばん持っていてね」

と付け加えました。

それからしばらく、けい君のかばんはおろされることなく、どこで遊ぶ時もけい君の首

けい君のこだわりがウルトラマンと判明した後は、それを利用して一緒に遊びやすくなたことは勿論です。子どものこだわりは興味の強さかもしれません。その事柄ひとつをめぐって、いろいろな遊びを考えられるのもすてきです。また、このように一人のこだわりが保育の中でうまく生かされていくことは大切だと思います。

しかし、遊びの中ではどうしてもこだわっているとトラブルの原因になることもあります。たかし君はにこにこしながら、いたずらをしかけてきたり、五歳の子と一緒に遊ぼうかと気軽に声をかけたりできる活発な三歳の男子です。心の中に楽しいイメージをいっぱい持っているようで、会話も弾みます。例えば、給食の時（岐阜は幼稚園でも給食です）どこからかはえが飛んできて、食器のまわりをうるさく飛び回ります。

「はえがうるさくていやね」と、私がつぶやくと、

「へんなおじさんのはえだね」とたかし君。

「え、へんなおじさんのはえ？」と聞き直すと、

「そう、へんなおじさんのはえ」

それ以来、三歳児のクラスでははえを呼ぶ時に「へんなおじさん」とか「いやなおじさん」などの呼び名がついてしまい、（おじさんと呼ばれる方たちには申し訳ないのですが）はえがくると「へんなおじさんが来た」と騒ぐようになってしまいました。

そんなたかし君の大好きな遊びはダムごっこです。五歳児たちがしている時にも、いつ

